

Title	西脇順三郎の<<漢語ギリシャ語比較>>とはなにか
Sub Title	La folle du logis de Nishiwaki Junzaburo
Author	工藤, 進(Kudo, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2013
Jtitle	Booklet Vol.21, (2013.) ,p.74- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Junzaburo Nishiwaki as illuminant 5 図版削除
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000021-0074

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西脇順三郎の《漢語ギリシャ語比較》 とはなにか

工藤 進

いちど活字になった詩は詩人の支配を離れ批評に一人で立ち向かわなければならぬ。作品を判断する主体はもはや作者ではなく読者自身である。

西脇順三郎が1933年、イギリス留学からもどって8年後に出した詩集『Ambarvalia』は日本の現代詩に革命をもたらしたが、戦後まもなく、旧作のラテン語表題を『あむぱりわりあ』と平仮名表記されふたたび世に出た。大方の意見では初版の方の評判がはるかによい。ここで両版を比べるわけではないが、第2版ではとくに後半部分で大幅な削除、修正、あるいは表記上の書き直しがなされていることは注目しておかねばならない。詩人あるいは作家はこのように自分の作品に関わりつけ、整形手術を施すほどに事後説明を加えて自己をリニューアル、あるいは、作品をあたらしい感性に適合させようとするものだろうか。

ブルーストは『失われたとき』の書き出しをなんども書き換えた。第1巻、『スワン家の方』が出たあと、この巻の修正書き換えは当然不可能になつたが、作家の死後、最終巻の出版が終わったときには、全体が当初予定していた量をはるかに越えてしまつた。校正ごとの頻繁な書き直しや新しい文章の付け足しを行つたことの影響で、7巻に膨張した全体から見た場合の初巻冒頭の意味は、その時間的位置、また物語上での役割が第1巻出版時に考えていたものから変質し、作家が当初3巻本で出そうとしていた時とはかなり違つたものになつてゐる。版ごとの書き換え可能な詩や和歌と、それがふつうは不可能な小説とでは事情が異なるが、西脇順三郎の詩業には、この「書き換え」が目立つ。

この拙文は筆者の *Philologie d'Orient et d'Occident* (サーバー: 仮canalblog) と題したブログの中の、2010年夏から秋にかけて作成した西脇順三郎に関する20回(仮文)をもとにしている。この仮文には生田康夫氏の邦訳(『言

語文化』第28号）があるが、原著から2年経った今、西脇六十歳以降の不思議な比較作業とは一体何だったのかということに焦点をあて詩人に倣って今度は日本語で考えてみようと思うのである。

晩年の西脇が没頭した「ギリシャ語と漢語の比較」にかかる、1万枚近い400字詰め原稿用紙がわれわれの大学に遺贈された。そのほとんどはコピー製本されたが、製本されず研究室の書類棚に収められているものも若干（1270枚）ある。原稿そのものを概観してまず気付くことは、これらの多くは「完成」という状態半ばの原稿にみえることである。大きく×印が入れられた原稿がある。あるいはそういう印がなくともこれは明らかに新しく書き換えられるのを待っているに違いないというものが何枚もあった。したがって原稿総数を確定することは難しいが、総数確定は意味を持たない。意味があるのは、この作業における絶えざる「書き直し」である。一体かれは何に向かっていたのだろうか。

西脇順三郎は六十八歳で慶應義塾大学を去り、自宅近くの明治学院大学英文科大学院で教えることになった。かれはそこで『詩経』の輪読会を発足させ、同時に漢語とギリシャ語の比較に本格的に取り組み始める。漢語や古代ギリシャ語に必ずしも詳しくない弟子たちにはほとんど理解できないこの仕事に注がれた情熱はどこから生まれたのだろうか。

詩人が八十八歳で亡くなるかなり前、いわゆる学園紛争の余韻がまださめやらぬ頃から、この「東西語彙比較研究」に関わる草稿の入った大きな木綿袋がいくつかの研究室に置かれたが、当時は誰もこの原稿をいったいどのように扱ってよいのかわからなかった。というのはそれが、比較というより詩的ノートであるように思えたからである。専攻が言語学ということになっている私の研究室に英文科の都留信夫教授が持て来られた二つの大きな布袋は気にはなったが、漢語とギリシャ語とを比較吟味する力量は当時の私にはなかったし、そもそも現代音の漢語とホメーロス時代のギリシャ語、またその音声を文字で比較することの意味がよく飲み込めないでいた。

1982年の1月、西脇米寿のお祝いに、新倉俊一教授をはじめとする弟子たちは草稿の一部の写真版を一冊の美しい装丁本にして著者に贈った。写真版にした理由は西脇の、漢語とギリシャ語の手書き文字を活字にするのは大きな困難を伴うからであり、また活字にすると西脇独特の美しい手稿の味わいをそこねる恐れがあったからと考えられる。さらにまた、この東西二言語の音声的比較という西脇の仕事が、比較言語学という学問の観点からどのような意味があるのか誰もわからなかったからでもある。「本」という体裁はとられたが、内容がどのような意図の下に作成されたものであるのか明確ではないという意味で、優れて西脇的「不思議の本」である。

その他の草稿の大部分は、そのまま製本されて十数冊の冊子となり、明治学院大学「言語文化研究所」の書棚に収まっている。この研究所は1965年、西脇主催の『詩経』を読む集まりから生まれたが、ここは以前、西脇から「漢語とギリシャ語比較」の御説を拝聴する場であった。この研究所の所員、日本文学の満田郁夫教授の旗振りで今まで続く「ホメーロス輪読会」がはじまつたのは、西脇没年の翌年、1983年の4月である。この読書会は西脇遺稿の解明を目的にしたものではなかったが、満田教授も私も遺された原稿のことは口には出さなくとも頭の隅にはあった。

毎週火曜日（のちに水曜日）一限に行われたこの読書会は一般にも開放された。初代講師は現在日本大学教授の中西裕一氏である。ホメーロス2作品のうち、最初に取り組んだ『イーリアス』への参加者は内外から10名を越えた。これまでの参加人数は百名を下らないだろう。初回は5行、それから間もなく15行となり、この15行のペースが数年続いた。毎週あらかじめ音読担当者と解釈担当者とを決め、日本語の既訳や英訳はもちろん、参加者がそれぞれ得意とする外国語訳を参考に、ゆっくりとしかし着実に読み進めた。使用テキストは手に入りやすいロウブ版ではなく、古注の豊富な仏・ピエロン版をプリントして用いた。リモージュ大学の古典語学者ジャン＝ピエール・ルヴェ教授を招き数回ゼミをしていただいた縁で両校に現在まで続く交流が生まれている。

『イーリアス』を読み終えたあとはただちに『オデュッセイア』に移り、2作品、27800行余を読み終えたのは2009年である。後半のペースは毎回40行から50行になっていた。最初のころ15行の予習に3日もかかったものが、読み終えるころは、40行の予習が2時間で済むようになった。

『Ambarvalia』には、染物屋の下宿の2階でホメーロスを読んでいるという若い頃の西脇自身を思わせる詩「ホメロスを読む男」がある。『イーリアス』と『オデュッセイア』の2作品を終えるのにホメーロスの好んだ数字である「9」の3倍、27年かけた結果、私は詩人の美しい漢字とギリシャ文字に、^{けいきょう}氣圧されることなく向き合うことができると感じはじめている。原稿を遺したのはこうしてわれわれに勉強させるためだったのかもしれない。

西脇の比較方法は発音の知られたいいくつかの漢字を選ぶことからはじまる。漢字の意味からではなく音から出発するのだ。「探求」の実例をいくつかあげ、かれの漢語とギリシャ語との「比較」とはどういうものか具体的にみてみよう。

私の研究室に遺された1270枚中、345枚目の右側は、旧漢字「觀 kuan」（見る）にギリシャ語で想定される意味及び、音声上の類似を書き留めたものようである。原稿には次のように記述されている（写真1）。

《1881 クワン 觀 kuan 1、念を入れて見る ὄράω - 覧 [ó-χo-κω] (observe)



写真 1

2 望みみる 3 beware 4、かんがみる 鑑 5 うかがう σκοπέω 6、遊ぶ、見物する 7、うらなふ προϊγορέω 8、あらはす 顯φαίνω [φ-χ-κω] 9 示す 10 外觀σχῆμα (appearance)、11、容儀 appearance σχῆμα 12 ものみ σκοπιά、σκοπή 13 道士のいるところ、σκηνή 14 有様、状景 appearance σχῆμα 15 鶴 こうのとり πελαργός (stork) πέλαργος 鶴カク つる γέρανος (kwan) πελάργος 鑑カン かんがみる σκοπέω》

15の「鶴」と「鶴」について「漢はこの二語をあべこべに使った」という注記が縦書きされているが、あべこべに用いられたのは、鶴 (kuan) と鶴 (hok, hak, kak) ではなく、鶴と鶴 (hok, kok) の間違いだろう。さらに「鶴」と「鑑」との間になぜか「利 li」という文字が入り、それに [it profits one]、λῦσίτελέω [利益になる] という注記があつて、「利」にあたるギリシャ語として λῆμμα (gain)、さらに、λῆμμα とは語源的にまったく無関係な λύω [解く、解放する] という動詞が記されている。

この原稿のかなり脈絡を欠く記述のしかたからして、なにか始原的なものへの方向性は感じられるものの到達には至ってはいないこと、また内容は語源学のような合理性を追求したものではないという二つのことがわかる。漢語「觀」と並べられたギリシャ語単語との語源的つながりを示そうとしたものでは明らかにない。むしろ一見、漢語「觀」kuan (これはたまたま古代音と現代音は同じ) から連想されるギリシャ語を、日本語訳を付けて並べてみたものでしかない。これは語源学の方法論に対するパロディーと言った方がわかりやすいかもしれない。

西脇詩には脈絡のない語を並べ、文法的には正しい文を作つて超現実的

イメージを描いて見せる詩（例えば「馥郁タル火夫」）があるが、この「漢語とギリシャ語比較」はそれと同質のものであり、さらにその方向への過激な邁進を感じさせる。

「觀」は古代音でも kuan だが、西脇原稿の kuan は現代音表記である。西脇が中国音として原稿表記に用いている発音は、漢語の現代の標準音、いわゆる北京官話音であった。これらの発音は戦中戦後にかけてよく用いられた鹽谷温博士の『新字鑑』（初版1939年、高等教育研究会）を参考にしていてそこから採られている。「觀」の字の右上には1881という数字がメモされていた。長い間これが何を意味するのか不明だったが、「觀」の字の載る『新字鑑』のページ番号であることが最近偶然判明した。かれが愛用した『新字鑑』（改訂増補第五版1957年版）は現在、明治学院大学言語文化研究所に保存されている。

西脇の「漢語とギリシャ語との比較」は「漢語の現代音」と「ギリシャ語の古代音」との比較であり、比較言語学的には意味のある作業ではない。こうした比較では、ギリシャ語音とできるだけ同時代の漢語音を用いるべきだから漢代以前の漢語音、あるいは少なくとも古い発音を残している呉音を用いなければならない。しかし詩人がそのことに留意した形跡はない。この作業には前漢から『詩經』の周時代にかけての音を調べ上げねばならないが、こうした歴史的音声変化が手軽にわかる漢語辞典は西脇が比較を始めた頃の日本では皆無と言ってよい。

諸橋轍次の『大漢和辞典』（大修館）は1960年に13巻が一応完成し、15巻全巻が完成したのは西脇が亡くなつて20年近く経った西暦2000年である。また『大漢和』をもとにした『廣漢和』の上中下、索引の4巻が完成するのは詩人の没年である。『大漢和』は、語形と語釈、また分量に関して現存するなかで世界最大最良のものと言われているが、音声に関しては意外に淡白で、全ての語の歴史的推移が詳しく述べられているわけではない。たとえ詩人がこの大辞典を使ったとしても、専門違いの弟子たち相手に『大漢和』を駆使して『詩經』を講義することは不可能だったに違いないし、またその必要もなかった。彼の目的とするものはおそらく別のところにあったからである。

上古漢音の成り立ち及び歴史的推移がよく解説され、古代の音を保持していると言われる中国南部の呉音にも詳しい辞書としては、現在のところ藤堂明保の『漢和大辞典』（学習研究社）がある。しかし中国語音を一般向けに詳説したこの辞典の初版は1978年、つまり西脇のギリシャ語漢語の比較作業が、未完状態のまま決定的に停止してしまった頃である。最晩年の詩人がこの辞典の出版とその内容を知っていたとしても、かれはそれを使ってこれまでの数千枚を書き直すことはできなかつたし、しようともしなかつただろう。比較草稿はこれまでの詩的作業の延長であり比較言語学のメモ



写真2

ではなかったからである。

いまみた「観」とギリシャ語比較の冒頭の一行はつぎのようになっている。

観 kuan 1、念を入れて見る ὄράω - 覧 [ó-χo-κω] (observe)

「覧」の字は ὄράω の ρά に対する連想から生じたものであることは明らかだが、ὑράω の υ- に下線が引かれているのはなぜか。これを説明するものが「ó-χo-κω」(それに、8、あらはす 頸 φαίνω [φ-χ-κω]) という不思議な〔 〕注記である。これは υ- という喉音 (ho) が χo (kho), κω (kó) に、φ (ph) は χ (kh), κ (k) に通じると西脇が考えていることを示している。つまり詩人にとって υ- は、「観」 kuan の k (+ o) でありうるのである。

501枚目の左端(写真2)は「發」の旧字「發」に対して連想されたギリシャ語がちょうど20語、日本語訳を先にして並べられている。

發 fa ハツ ホツ 〔『新字鑑』に同じ記述〕

1. はなす [射] いる στοχάζομαι [shoot at] 2 行く χωρέω 3 去る χωρέω 4 興す / おこす βαστάζω / κουφίζω / おこる 5 あげる βαστάζω あがる 6 のぶ 舒 προτείνω 7 つかはす ἀποστέλλω 8 うごく πάλλω 9 あらはる φαίνω / φᾶνω 10 もる ἀπορρέω 11 散る πάσσω 12 出す πᾶρέχω 13 はじまる υπάρχω 14 たがやす φάράω [筆者注 φυράω?] 15 みだる φύρω 16 ひらく ήμερόω [φö - φö - φöñ - φän - fä] 17 あきらかにする σαφηνίζω 18 行う ἐκπράσσω 19 はしる ὄφμάω [ホツ] 20 あばく / ἀποκαλύπτω

前述したように詩人はギリシャ語では喉音（西脇用語では glottal stop、声門閉鎖音）hが場合によって p(h)- や b(h)- や k(h)- と通じることを知っていて、漢語 *hatsu* あるいは *hotsu* から連想されるギリシャ語の中にこの *hatsu*（漢音）*hotsu*（吳音）の断片を見つけ出そうとしているようである。20個の語群のなかには重複している語もあるが、ここで下線を付されている部分は -kha-, -khō, kou-, -po-, (u)pa-, pro-, -pra-, bas-, pha-, phē-, phu-, hē-, hor- などである。印欧語学者はこの音節の間の語源的脈絡のなさに驚くだろう。また中国語学者は、ギリシャ語に詳しくなくとも、漢語の現代音と古代ギリシャ語とのこのような対比に意味を認めることはないだろう。

しかしこのうち pro-, -pra- というように、ph- にも kh- につなげることが難しいものを除くと、いずれも k(h)(V) (V=母音) と p(h)(V) という二つの原始音に単純化される。

一方、藤堂明保の『漢和大辞典』によれば、「發」の上古の形は *piuāt* である。語中の -iu- は後発の介音（つなぎの音・半母音）であるから、*piuāt* の最古形は *pa(t)* (-a- は核母音) であったと推定できる。つまり、漢語「發」に関する西脇のギリシャ語連想から抽出された p(h)(V) は、この漢語「發」の推定最古形 *pa(t)* に極めて近く、「發」の下に小さく記された *fa* に通じる。

原稿941枚目の中心部分は、漢字「魚」という語に充てられた次のような説明である（写真3）。

魚 *yū* 1. うを ① [ギヨ] *iχθύς* [χθ- χ-] [gū - gö]、② 鮫人 [gō-gō-kō] 2 漁夫 *γρίπων* [夫], *γρίπενς* [夫] [grīp-gjū-gjō] [grīp-gjū-gjō] (筆者注 - バイイ希仏辞典の表記は *γριπενς*。シャントレース語源辞典によれば *γρίπος*, *γρίφος* [わな、謎] から派生。*γρίπος*, *γρίφος* の語源は不明) 3 すなどる *iχθυάω* 4 官人のおび *ζώνη* [gj-gjō] 5 われ（吾）*ἐψώ* [g-gi] 6 馬の両眼の白きこと (pale) *ώχράς* [go-gjō]。

ギリシャ語「漁夫」に付けられた注 [grīp-gjū-gjō] [grīp-gjū-gjō]（掴む・魚？）はおそらく詩人の遊びだが、学者はこれが奇抜な発想だとは思わないに違いない。

1の *iχθύς*、3の *iχθυάω* とも アンダーラインは -χθύ- の部分に引かれている。この部分は、シャントレース、マイエ、エルヌー、ポコルニー、ピーカスといった最良の語源学者によれば、いくつかの印欧語の「魚」の語源を説明する際の正にカギとなる部分である。西脇は東西共通の「魚」の語根を漢語の古代音に遡ることなく、またいくつかの西洋古典語や現代語を比較検討することなく、漢字から連想されたギリシャ語の中から、その正統的な語根をいともあっさり抽出してみせるのである。

「魚」の古代中国における発音は、*yū*（または *gū*）ではなく、藤堂博士の



写真3

辞典によれば、*ŋiag*（上古）、*ŋio*（中古）である。魚は呉音では *go*、漢音では *gyo* と発音され、現代北京語では *ü*。日本では単語としては *gyo* の *g* 音が消え、*io*、*uo* となるが、複合語としては、漢音 *gyo* は金魚、魚肉、魚介といった語でそのまま、呉音 *go* は日本語の魚名、アマゴ、アナゴ、カサゴ、コウナゴ、イカナゴなどに同様に残る。東の代表的言語としての中国語と西の典型的古典言語としてのギリシャ語との間には、実際、魚のほか、牛（上古漢 *ŋrog*, *ŋiau*, ギ *βoūç*）、犬（上古漢 *k'uen*, ギ *κuōv*）、雁（上古漢 *ŋān*, ギ *χṇv*）、流（上古漢 *liog*, ギ *þéω*）、授（上古漢 *dhiog*, ギ *δiðωμi*, 印欧語 *dō-）など、語根が共通と思われる語が少なくなく、西脇がこうした関係に無知だったはずはないが、かれは語源学者のやり方ではなく詩人の方法で語の始源に迫ったのだ。

詩人の「魚」の漢語音からはじまるギリシャ音連想はさらに、唐王朝時代の役人が身に着けていた魚形の帯に向かい、女性の用いた帯を表すギリシャ語 *ζώνη* [gj-gjo] を連想したあとで、一人称単数代名詞 *εγώ* [g-gi] に突然結びつく。これは音の共通性だけではなく、「魚 (ŋio)」という語の発音が古代中国では、我 (ŋa) や吾 (ŋo) の発音に近く、「魚」が、我、吾、余 (yio)、予 (yio) と並んで一人称代名詞としても用いられていたことを詩人は知っていたからだろう。

これらの語彙の連想順序は彼の愛用した『新字鑑』の「魚」項目の意味配列にほぼ一致する。詩人はこの辞典の「魚」の語義順序に従い、英希辞典を用いて音の関連性がありそうなギリシャ語を探り出したに違いない。

6 の「馬の両眼の白きこと (pale) ὠχρός」については、『新字鑑』の語義イロハニホへのヘ（つまり 6 番目）に、「両目の白いという馬」という説明

がある。字典にはもちろん pale という語は載っていないが『新字鑑』の辞義説明から連想されたこの英語をもとに $\omega\chi\rho\omega\varsigma$ にたどり着いたのだろう。『新字鑑』のハ（3番目）の「うを（魚）の皮」の語義は無視され、代わりに「すなどる」 $i\chi\theta\upsilon\omega\omega$ が入っている。

印欧語喉音理論と西脇順三郎

西脇は、太平洋戦争中にすでに完成していた博士論文『古代文学序説——幻影の人——』を1948年に出版した。その上巻第5編、第4章「詩人の術」で、古ゲルマン語において母音の頭韻を避ける理由をこう述べている。「第一、母音の頭韻は子音のそれに比して困難が大であることは明らかである。母音をもつて始まる言葉の数は子音をもつて始まる言葉より遙かに少ないのである。第二、若し母音と子音の頭韻を作詩の組織として同時に許したとすれば頭韻の効果が減少することは明らかである。どちらか一つにする方がその特色が明らかになる。それではどちらかにするかとなると子音の方が第一にあげた如く言葉の数が多くより便利である。[...]。一説に母音の場合は、"glottal stop" [?] を頭韻にしたものであるといはれてゐるが、実際の問題として歴史的事実を確かめることが出来ないことが残念である。またホメーロスの場合の digamma の如く言語的に証明することができないので、この説はいまのところ未定の問題として残つてゐる。」（東京・好学社、210-211ページ）。

1878年の『印欧語母音原始体系覚え書き』で提示されたソシュールの有声音係数 *coefficients sonantiques* は長い議論のすえ現在は、母音 *e* の音色をもつものは *H1*、*a* の音色は *H2*、*o* の音色は *H3* という記号で表されている。*H* は母音的音色をもつ喉頭音（あるいは咽頭音）の略号である。この難解な論文はギリシャ語長母音 η , \bar{a} , ω （基本的に短音である *a*, *ı*, *u* は韻律の要請で長音になりうる。*a* の長音字はない）の形成を、ただ一つの印欧原始母音 $*e$ （実体は不明）で説明しようと企てられたものらしい。三つの長母音 η , \bar{a} , ω を得るため、図式として、 η に対して $*eH1$ 、 \bar{a} に対して $*eH2$ 、 ω に対して $*eH3$ が考えられている。 $*e$ は共通なので *H1* ($> e$)、*H2* ($> a$)、*H3* ($> o$) と還元され、 $*e + He$ が η 、 $*e + Ha$ が \bar{a} 、 $*e + Ho$ は ω となる。長音形成後、原始喉頭音は消失するか音韻的に語中に実体化する。

後に喉音説とよばれるこの説は、当時知られていた言語の中にそれを支える具体的証拠がなかったためにほとんど無視されていたが、楔形文字の解読（1917年）の10年後（すなわちソシュール論文のはば50年後）、ヒッタイト語音韻の研究に取り組んでいた言語学者クリオヴィチ（1895-1978）によって信憑性が与えられた。

オクスフォードのアンソニー・フォックス（1995年）によると、ラテン語 pa:s--(cō)（養う）は、ヒッタイト語の動詞語根 /pahs-/（守る）に遡り /pahs-/ の印欧語段階は $*peH2s-$ が想定される。またヒッタイト語 *pa-ah-hur*（火）の喉音部分 *h-h* はギリシャ語では消滅して $\pi\bar{\upsilon}\rho$ （火）となる。ラテン語 *ante*

(前), ギリシャ語 *άντι* (対) に相当するヒッタイト語 *hantezzi* (初) では語頭が喉音であることがわかる。印欧祖語研究はこの喉音理論とヒッタイト語解読で飛躍的に進展した。

ソシュールは1913年に没した。日本ではジュネーブでの弟子が講義録を持ち寄って作成した『講義』(1916年、邦訳は英語より早く1928年、改訳版が1940年)だけがソシュールを代表するものとされているが、これはソシュール自身の手になるものではない。かれのもっとも偉大な業績は1878年、21歳の論文の中で展開した理論である。

1925年に帰国した西脇は喉音理論の展開のかやの外にいたが、日本で推敲した博士論文の古ゲルマン語頭韻について、「(頭韻の効果には) 子音の方が (...) 言葉の数が多くより便利」と述べている。かれは「すべての印欧語母音には喉音が先行した」というヨーロッパの議論の帰結を詩人なりの方法で予知(期待?)していたと言わねばならない。

ホメーロス韻律の基本構造が頭韻、脚韻ではなく、長・短・短格 (dactyle) と長・長格 (spondée) から成る六脚韻詩であることはホメーロス読みの西脇は当然知っていたが、印欧語の韻律組織には中世の叙事詩のように、頭韻も(脚韻も)関係するものと考えていたのかもしれない。喉音理論以前は語頭が母音の場合、母音のまえにもともと子音があったかどうかは行中では韻律でわかるが、行頭ではわからない。一方、喉音理論では印欧語語根は語頭に裸の母音をもつことはあり得ないので、頭韻が母音か子音かの区別自体無意味なのだが、詩人は古ゲルマンの詩がこの原始喉頭音を消失した言語の状態を反映したものとは考えなかつたようだ。

しかしあれはホメーロスの読み手として、古来注釈者が *digamma* (/w/) のような隠れた音を掘り起こし、現存の子音を重複させて韻律を整えることを知っていた。ホメーロスのテキストは音の不完全な表記であり、西洋の注釈者は主に韻律法を手がかりに二千年以上にわたって、テキスト(文字状態以前の声の状態も含む)の始原の状態がどんなものであったかを追求してきた。喉音理論はこうした古典研究の蓄積の上にある。西脇はソシュールの有声音係数理論の展開を知らなかつたと思われるが、その前提となつてゐるものは大方知っていた。

線文字B言語(ミュケーナイ時代のギリシャ語)の解読もヒッタイト語同様、ギリシャ語古音の実体を人々がよりよく知るきっかけとなった。*ἄντι*(王)という語は「短・長」律 (iambe) なので、基本的に「長・短・短」律のテキストでは脚頭に来ることはない。『イーリアス』に頻出する文型、*Tòv δ' ἥ/μειβετ' ἔ/πειτα 'ἄ/ντι* ἀνδρ/ρῶν Αγα/μέμνων「すると彼に答えて人々の長アガメムノーンが言った」の *ἄντι* には韻律上、母音衝突を避けるための *digamma* が古くから想定されていたが、線文字Bの一語 *wa-na-ka* が (w) *ἄντι* と解読され、*ἄντι* の前の *digamma* が決定的に実証された。

西脇は『古代文学序説』の中でヒッタイト語にも線文字Bにも言及することはできなかつた。スタートヴァントの『ヒッタイト語比較文法』は

1951年、『ミュケーナイ・ギリシャ語文書』は1956年、後者の出版は西脇が漢語とギリシャ語の比較に取り組む6年前のことである。

言語記号の恣意性と西脇順三郎

『印欧語母音原始体系覚え書き』の2年後、『サンスクリットにおける独立属格の用法』(1880年ライプチヒ)により *summa cum laude* (最優秀) 博士号を得たソシュールは高等研究学院のミシェル・ブレアル(フランツ・ポップの『印欧語文法』の仏訳者)に師事するためパリに居を移したが、そこでたちまち力量を認められ高等研究学院の講師となる。それ以降のソシュールは小論文しか書かなかったが、ごく初期の書き物の中に、トロイア戦争のギリシャ軍総大将 $\Lambda\gamma\alpha\mu\epsilon\mu\nu\omega\nu$ アガメムノーンの名の語源に関する短い論考 (*Mémoires de la société de la Linguistique* IV, 1881. ブレアルによって1868年に創刊された『パリ言語学会』の年報) がある。

線文字B解読でヴェントリスに協力したチャドウィックはその著書(1977年)で「ホメーロスはミュケーナイ時代のギリシャ語に知られていなかったタイプの名は使用しなかった」と述べている。しかし『ミュケーナイ・ギリシャ語文書』中、ホメーロスの英雄の名に対応するミュケーナイの人名リストにアカイアの英雄 $\Lambda\gamma\alpha\mu\epsilon\mu\nu\omega\nu$ およびトロイア方の英雄 $M\acute{e}\mu\nu\omega\nu$ の名はない。 $\mathcal{O}\delta\nu\sigma\sigma\epsilon\acute{u}\varsigma$ や $\mathcal{A}\chi\iota\lambda\lambda\epsilon\acute{u}\varsigma$ と違って、これらの名はギリシャ語で説明できそうである。しかし $\Lambda\gamma\alpha-$ < $\ddot{\alpha}\gamma\omega$ (率いる) はよいとして、 $\mu\acute{e}\mu\nu\omega$ という動詞はギリシャ語にはない。 $\mu\acute{e}\mu\nu\omega\nu$ は $\mu\acute{e}\nu\omega$ (とどまる) から生じたようだが2番目の - μ - をどのように説明すべきか。

「- $\mu\acute{e}\mu\nu\omega\nu$ は * $\mu\acute{e}\nu\mu\nu\omega\nu$ の置換であることを認めるだけでよい」というソシュールのあっけないほど簡単な解はすでに、後年熱中することになるアナグラム的単純さを示している。「この MeNMoN という形は鼻唇音と鼻齒音を交互に二回発音することを強いる。この位置では中間の n と m は、それらの音を引き寄せる器官の音に近付くためお互いの位置を交換することが要請される」。

この音位転換 *métathèse* による解決自体は目覚ましいものではない。むしろ、ホメーロス『イーリアス』XII, 133, 136〉も用いている $\mu\acute{e}\mu\nu\omega$ 〈 $\mu\acute{e}\nu\omega$ の重複形〉の分詞形の方が近いと思われる。注目すべきは、ソシュールは教授活動の初期から固有名詞の語源に关心を持っていたことである。固有名詞は本来、対象に明確に結びつくことができればよく、普通名詞的意味はむしろ邪魔になる。しかるに音と意味との間の恣意性を主張したソシュールが、固有名詞 $\Lambda\gamma\alpha\mu\acute{e}\mu\nu\omega\nu$ をギリシャ語の文脈 (<* $\mu\acute{e}\nu\mu\nu\omega\nu$ < $\mu\acute{e}\nu\omega$) によってその関係性を有意なものにしようとしていたのである。

「(言語) 記号の恣意性はだれにも反駁できない」というソシュールの説明は、名とモノとの間に自然な動機付けはないとするヘルモゲネス的論理の痕跡をとどめている。こうした19世紀の記号の恣意性をめぐる議論につ

いて、アンドレ・シェルヴェルは『ロマンティズム』（1979年25-26号）のなかで「歴史比較文法の発展は恣意性の問題をはっきりとした枠、すなわち〈原始語根〉の枠の中に位置づけることになる」と述べた。

漢語から出発しギリシャ語語根を涉獵する西脇は、恣意性の明るみから出発しながら有意性（アナグラム）の闇に戻るソシュールに似ている。

基本的に表意文字の国である日本では、記号の恣意性の議論はヨーロッパのような形をとらなかっただし、あのような広がりを持たなかっただ。というのは、日本のシニフィアンは根本では音声ではないからである。シニフィアンはむしろ視覚的だ。そこでは記号は文字（*gramma* < $\gamma\rho\alpha\phi\omega$ 握く、書く、描く）である。文字は意味と切り離すことは決してできない。中国や日本においてサンスクリット・西欧の音素概念がなぜ発展を見なかつたのか今やよくわかる。音素は音節という意味の究極単位の一構成要素にすぎないのだ。音（耳）と文字（目）のつながりが言葉の始原からあつた漢字の国に比べ、ギリシャ社会の音声から文字への移行はとてつもなく遅い。

漢語ギリシャ語比較に注いだ情熱は、詩人が記号の恣意性原理に与することはありえなかつたことを示している。

西脇の詩的ヴィジョンの狭窄

西脇は英語、仏語、ラテン語でも詩を書いた。新倉俊一教授は詩人が1925年、ロンドンで英語詩集『Spectrum』を自費出版したことを年譜で伝えている。また詩人は、オックスフォードで組織された詩のコンテストにラテン語で参加しようとした。さらに、帰国途中のパリでは自作の仏語詩を出版する意図も抱いていた。

しかしながら『Ambarvalia』以降の彼の詩作品の主要言語は日本語である。戦後の改訂版『あむばりわりあ』では、全体的にアルファベット表記は削除される。ラテン語の哀歌（英國で古典語詩コンテストに参加しようとした作品）は追放され、地中海的明晰なイメージを持った美しい詩「コップの原始性」も同じ運命をたどつた。アルファベット表記としてはLE MONDE ANCIENとLE MONDE MODERNEの二つの仏語の見出しひか僅かしか残っていない。「AMBARVALIA」というラテン語題の詩には、初版にはなかつた日本語注（穀物祭）が付された。明るいヨーロッパ風「絨毯」を思わせた旧版『Ambarvalia』は、新版『あむばりわりあ』になってほとんど「畳」化してしまつた。新倉教授は皮肉をこめて、改訂版は初版の注釈書の役割を果たしていると述べている。

戦後西脇の詩は変化し、詩集『旅人かへらず』の感傷的雰囲気の中で内向的、復古調になつた。これは昔の友人たちを一人ならず絶望させたのである。

天使のわきを過ぎ／金髪の少年が走る（…）魚を（…）／指の間でしつか
りつかみながら、

これが西脇の詩の中で私がもっとも愛するイメージだ。ところがこのヴィジョンが詩集『第三の神話』(1956年)の「人間の没落について」と題された詩では、暗く疲れて再び現れる。ここにいる少年天使はなるほど若く金髪だが、すねて、いじけ、ほとんどしなびている。六十三歳になっていた西脇はこの詩集によって1957年読売文学賞を受けた。

金髪の少年の天使がウゲイという
魚を持ってはだしになって歩いてきた。
なにかへブライ語をつぶやきながら (...)

1933年の原詩は少年を次のように描いている。

林檎とサーベルをもった天使のわきを過ぎ
金髪の少年が走る
アカハラという魚を
その乳光の目の上を
指の間でしつかりつかみながら (コップの原始性)

天使と一体化した老少年はヘブライ語でこうつぶやく「この辺に栗が無いということは／けしからん かなりやなどは飼えない」。語る言葉は力なく、くすんで古ぼけ貧乏くさい。この言葉は西脇という詩の水車を回すに足る水の力をもはや持たない。原詩のイメージからなんという変わり様だろう。

かれの「漢語ギリシャ語比較」は、文学的栄光の裏で徐々に閉ざされて行った詩の内面からの脱出の試みではないのだろうか。

記号の恣意性と原始語根

ヨーロッパではプラトン以来、「名」と「モノ」との間の関係はつねに議論的であり、名は指し示すモノの性質に従って自然に付けられたと主張するクラチュロス派と、名付けの原理は社会的慣習によるものだとするヘルモゲネス派との対立が長く続いた。しかしソシュール以降、議論は様相を変えた。もはやモノと名との関係ではなく、音(音声イメージ)とその意味(シニフィエ)に分析可能な「記号」内の問題となった。意味するもの(シニフィアン)と意味されるもの(シニフィエ)との関係は恣意的であると言うソシュールに対し、バンヴェニストは「恣意性が存在するのは記号とモノとの間であり、シニフィアンとシニフィエとのつながりは恣意的でなく必然的なものである。精神は空虚な形式、名前のない概念を許容できない」と主張した(「言語記号の性質」1939年)。この見解にロマン・ヤコブソンが同調している。「音と意味との緊密性は語り手に、この外的関係を内的関係によって補完しようという気持をおこさせる」(『音と意味に関する六章』

1976年)。

言語のこの恐るべき問題に西脇の詩はどのように向き合ったのだろうか。かれの詩の中から一つささやかな例を取り出してみよう。

「天気」(『Ambarvalia』)の第2行目はこうなっている。

何人か戸口にて誰かとさゝやく

ここに「何人」「戸口」「誰」という三つの漢語がある。「戸口」、「誰」の読み方に問題は生じない。しかし「何人」の漢語には何通りかの読み方が可能だ。すなわち「なにじん」(詩集『失われた時』1960年、の第二歌、ルビあり)、「なんにん」、「なにひと、なにびと、なんびと、なんびと」。最後の四つはニュアンスの差こそあれ同じ意味だが、これと「なにじん」「なんにん」とは意味がまったく違う。解釈は語形から生じるのではなく、文脈、さらには詩全体に関わる。西脇は「なにひと／なにびと」の読みを好んでいたようだが、この選択は「なにじん」とか「なんにん」を排除することになる。

ここでナニ・ナン／ヒト・ビト・ピト間の音声上の差異は大きな意味を持たない。重要なのは、「何人」という単位が、意味の差異を伴う幾通りかの読みを可能にするという事実である。西脇に限らず日本語を使って仕事をする詩人は、読者に読み方の選択の余地を残している。漢字の意味は視覚的に理解される必要があり、聴覚はわずかの助けにしかならない。さらにそこに意味上、仮名の区切りの問題が加わる。「誰かと」は二通りの区切り方が可能だ。すなわち、「誰 - かと (一緒に)」と「誰か (?) - と (尋ねる)」だ。これは心の中の句読法である。

このような状況で、西洋の記号の恣意性原理で割り切ってしまう贅沢が許されるだろうか。語彙の真実を追求する詩人は、西脇のように原始語根の発掘に向かうのである。

原始語根を求めて

フランス方言学の方法論を『蝸牛考』(1930年)で実証してみせることになる柳田国男(1875-1962)は、1921年から1923年にかけてヨーロッパに滞在した。その期間は一部、西脇の滞在と重なり二人はロンドンで出会い意気投合している。方言学は記号の恣意性原理を前提としながらも、地方形を超えたところにある必然形を追求する学問である。言語地理学の創始者ジリエロンはソシュールと同じイス人、南仏語学者のほとんどは南仏出身、ブルターニュの後継者、ソシュールの弟子でもあったメイエは首都を遠く離れた中仏ムーラン、音韻学の理論家マルチネは19世紀にフランス領となったばかりのサヴォワ、西脇の西洋古典語の師であるアヌイ神父(写真4)はビレーヌのバミエ。フランスに限らず世界の優れた言語学者は地方、



写真4 1964年6月著者撮影

辺境国から出ている。西脇は新潟、柳田は兵庫。すべての地方人は首都の超越を夢見る。人名、地名の語源に異常な興味を示したパリ出身のプルーストはこの点、例外である。

プルーストの人名、地名フェチについては拙ブログの西脇に続く二十数回で詳説した。ここでは、第1巻『スワン家の方』に登場するコンブレーの司祭が、話者の叔母の求めに応じて村のサンチレール教会の守護聖人について語る一節の引用にとどめよう。

「あれがサンチレール様で (...) 地方によってはこれをサンティリエ Saint Illiers とかサンテリエ Saint Hélier、ジュラ地方ではサンティリ Saint Ylie などとさえ呼んでいます。サンクトゥス・ヒラリウス Sanctus Hilarius のこうした訛りは (...) とくに珍しいというわけではありません。たとえばユーラリさん、あなたの守護聖人サンクタ・エウラリア Sancta Eulalia の名前がブルゴーニュ地方では、(...) なんとサンテロワ Saint Éloi ですよ。聖女が男の聖者になってしまったわけです。」(1954年ブレイヤード版 第1巻 p. 105)

メイエの弟子ヴァンドリエスによれば、プルーストは学生時代、オーギュスト・ロンニョンの地名学の講義を受けていたらしい。「土地の名・名」という、小説にはまったくない題(第1巻『スワン家の方』第3部)は「土地の名・土地」(第2巻『花咲く乙女たちのかげで』第2部)の題名と対をなしている。首都生まれだが、国籍を得て100年も経たないユダヤ系フランス

人を母にもつプルーストには、言葉を含めてフランス固有のものに対して外国人が持つような強い憧憬があった。

ソシュールはアナグラムを通して、プルーストは地名、人名の語源、そして西脇は漢語ギリシャ語比較を通して、お互い相知ることはなかったものの、同じモノ、すなわち「原始語根」を追求したように思える。そして彼らはいずれも失敗した。

というのも、いかなる原始語根も存在しないからだ。すべては時の中に浮遊している形である。Μέμνων は μένων の重複形でありうるし、μένω は νέμω (分け与える、住む、放牧する) と入れ替わりうる。サンチレール Saint Hilaire は語根ではなく途中の一段階を示すにすぎない。西脇の「發」(hotsu, hatsu) も同様だ。しかし、かれらの想像力の狂気は大いに報われた。なぜなら一見無駄な仕事のあとに、詩的言語のはかり知れない可能性を残したのだから。(2012年10月15日)

(あとがき)

詩人はこの原稿を自分のどの詩作よりも大切にし、あらゆる災害や野蛮行為から救おうとしていたことを新倉俊一先生から教えていただいたのはつい最近である。

明治学院大学言語文化研究所の書棚に詩人がこの作業に用いた辞書がいくつか並べられている。漢語に関してはまず『新字鑑』(1939年初版)。実際に用いられたのは、1957年に増補改訂された第5版である。書棚にはこれが二冊あり、そのうちの一冊は少なくとも三冊以上に分冊されたうちの一冊である。ぼろぼろになったこの巻は、1560ページ以降がない。つまり全体の3分の1を欠いた状態で、かなり粗雑に自家製本されたものである。しかも、序とか索引のある冒頭部分は、1961年以降に出版された『新字鑑』のものが貼り合わされている。というのは、この部分には著者鹽谷博士の1961年2月の序があるから。つまり詩人は、時期を違えて、同じ辞書を少なくとも三冊購入していることになる。2000ページを優に超える辞書なので、詩人は持ち歩き易いようにバラバラにしたのではないか。あとの一冊はきれいな状態で残っている。私の所有する『新辞鑑』は1980年版だが、内容ページとも詩人の使った版と変わらない。

詩人が使った『英希辞典』は、S. C. Woodhouse の English-Greek Dictionary (London, Routledge Kegan Paul Ltd) の第2版 (1932年版、初版は1910年) である。この辞書にはギリシャ語が激しく書き込みされている。両辞書とも研究所の書棚に現存する。

(くどう すすむ・明治学院大学名誉教授／フランス文学、言語学)



ジョン・コリアより新倉俊一宛書簡、1974年10月21日